

未来を見て明日を知る — 井深大 ソニーのモルモット精神 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

太平洋戦争の末期、軍部の任命で戦時科学技術研究会に参加した井深大(1908-1997)は敗戦が近いことを確信した。アメリカに比べて技術水準が余りにも劣っていると痛感したからだ。日本の復興は技術力で決まると考えるようになった。

戦後まもなくソニーのルーツとなる社員20人ほどの会社を立ち上げ、それぞれの個性を活かした自由で愉快で理想的な工場の建設を宣言する。他社の真似を嫌い「他人がやらないことに全力を注げ」と独創的な技術開発を牽引した。

常に開発レースの先頭を走っても成果は大手にさらわれるソニーはまるで実験用のモルモットのようにだと揶揄された。しかし井深は逆に発奮する。モルモットが先駆者の異名であることをみずから証明しようと頂点への階段を駆け上がっていった。

母子家庭から科学の道へ

井深は現在の栃木県日光市の社宅で生まれた。古河鋳業の技師をしていた父は2歳のとき病死し、母のさわと父方の実家のある愛知県安城市へ移り住む。母は自活しようと幼子連れて母校である日本女子大の付属幼稚園の教職に就き、3年ほど東京・目白で暮らした。近所に『銭形平次捕物控』の人気作家・野村胡堂が住んでおり、母が彼の妻の学友だった縁で可愛がられる。成長してからも生涯の恩人として父親のように慕った。

やがて母は神戸の海運会社の社員と再婚する。新たな家庭で井深は旧制神戸一中に合格し、在学

中は無免許でアマチュア無線に熱中した。

科学の魅力に憑りつかれて第一早稲田高等学院から早稲田大学理工学部に進み、電気工学を専攻する。実験の過程で光を

自在に変調するネオン管を発明。「走るネオン」と名づけて特許を取得し、後年パリ万国博覧会に出展して金賞を受賞する。

卒業後、東京電気(東芝)の入社試験を受けて不合格となり、映画のフィルム現像や録音業務を手がける写真化学研究所に就職した。続いて系列会社の日本光音工業に移籍し、同社の出資で設立された日本測定器の常務に就任する。私生活では野村胡堂の紹介で戦後初の文部大臣となる内務官僚の前田多門の娘と結婚し、一男二女をもうけた。

1937年、日中戦争が勃発して軍需機器の注文が急増し、潜水艦探知機などの基礎となるレーダー開発を主導する。官民合同の戦時科学技術研究会に加わって大阪帝国大学理学部卒の海軍技術将校・盛田昭夫と出会い、国内外の情勢を分析して敗戦は不可避という認識で一致した。

1945年、終戦の翌日に軍需工場の疎開先の長野



井深大

から帰京し、10月に日本橋の白木屋百貨店ビルに東京通信研究所を開設。需要が多かったラジオの修理・改良が予想以上の評判を呼び、朝日新聞のコラムで紹介されて記事を読んだ盛田と再会する。翌年5月に株式会社へ改組し、ソニーの母体となる東京通信工業を旗揚げした。

自由闊達な理想の工場

新会社では名誉職として義父の前田多門が社長、井深が専務、盛田が常務に就任した。13歳年下の盛田は「金銭面に関しては私が何とかしますから井深さんは開発に専念して下さい」と励ました。

前田の人脈で著名な財界人が株主となり、野村胡堂や裕福な商家の盛田家も運営資金を提供した。設立趣意書で井深は「真面目なる技術者の技能を最高度に発揮せしむべき自由闊達にして愉快なる理想工場の建設」を高らかに謳っている。

設立当初は電気炊飯器を作ったり、陸軍の通信機材を放送用に改良してNHKに納めたり、焦点の定まらない試行錯誤がつづいた。1950年、社長に就任した井深は悪戦苦闘の末に国産初のテープレコーダーを開発。全国の小中学校に働きかけ、視聴覚教育の備品として注文が殺到する。

勢いに乗って真空管に代わるトランジスタの自社生産に着手し、1955年に日本初のトランジスタラジオを発売した。停電でも乾電池で聴けることから、台風の多い九州地方で飛ぶように売れた。

空飛ぶ営業マンと呼ばれた盛田は海外展開への準備を整え、世界最小のスピーカー付きポケットラジオの輸出を開始する。感度がよく手頃な価格で大ヒットし、アメリカではクリスマスが近づくと品薄となって特別にチャーター便を用意した。

すべての商品にSONYのロゴを入れ、1958年に社名もソニーに変更する。SONYは音を意味する英語のSonicと坊やを意味するSonnyを語源として組みあわせた和製造語だ。

評論家の大宅壮一は東芝に関する週刊誌の記事でソニーに言及し、トランジスタの分野で「ソニーは東芝のモルモットの役割を果たした」と評した。モルモットのイメージが世間に広まり、当初は井深も憤慨したもの「モルモット精神を上手に活かしていけば、いくらでも新しい仕事はでき

」と社員を奮い立たせた。

1960年に世界初のトランジスタ・テレビ、1962年に世界最小・最軽量のマイクロ・テレビ、1968年にトリニオン方式のカラーテレビを発売し、着実に業績を拡大する。アメリカのCBSと合併でCBSソニーレコードも設立し、文字どおり世界のブランド企業へ飛躍した。

生涯の光と十字架

1971年、井深は盛田に社長を託して会長に就任する。社外活動が中心になり、移動の際は教科書サイズの録音機にヘッドホンをつけて好きな音楽を聴いていた。しかし重く持ち運びに不便なことから、もっとコンパクトなものを開発するように提案する。こうしてウォークマンが誕生し、1979年に発売されて若者から圧倒的に支持された。

家庭では妻と不仲で義父の死後に離婚し、57歳で再婚していた。次女が知的障害者で教育活動に情熱を注ぎ、幼児開発協会やソニー教育振興財団を設立して理事長に就任する。とりわけ幼児教育では「母親の役目は何にもまさる貴重なものです。母親こそ子供をどんな人間にも育てることができるのです」と持論を展開した。幼い日の母の姿を思い浮かべていたのかもしれない。

知的障害の娘は「私の生涯の十字架であると同時に私の生涯の光である」として早くから自立を促した。大分県に障害者が働ける工場としてソニー太陽を建設し、成長した娘も特別扱いせず食堂で働くようになる。ある日、工場を訪れた井深は「数も数えられないわが子がみんなの食事の世話をてきぱきとこなしている姿を見たとき可愛い、そして誇らしいと思った」と語っている。

晩年は身体が不自由になり、車椅子で移動していたものの、意識は最後まではっきりしていた。東京・三田の自宅で89歳で永眠し、多磨霊園に埋葬される。葬儀の際、ソニーの元社員でノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈は「温故知新という言葉があるが、井深さんは違った。未来を考え、見ることで現在を、明日を知る人だった」と弔辞を捧げた。

墓碑に戒名はなく、ただ「自由闊達 井深大」と刻字された。